

令和5年度 園内研究まとめ

研究主題「共に遊びを楽しむ幼児を育む ～人との関わりを豊かにするための環境の工夫と教師の援助～」



江東区立ひばり幼稚園

【主題設定の理由】

近年、園児数が減少傾向にあることや、コロナ禍により様々な人と関わる経験が少なかったことから、子どもたちは人との関わりにおいて様々な刺激が受けにくいという課題がある。

このことから、幼児が様々な人と共に遊びを楽しむ体験を積み重ね、その中で様々な感情を味わったり、刺激を受けたりできるような保育を目指して、今年度は、昨年度と同じテーマで研究を行った。

*主題の「“共に” 遊びを楽しむ幼児を育む」の“共に”の対象は、「学級の友達」「異年齢の幼児」「教師などの大人」であり、様々な人と様々な場面に関わることを通して、人との関わりが豊かになっていくと考えた。

【研究の方法】

- 生活や遊びの場面でのエピソードをとり、幼児の姿を分析した。そして、教師の関わり方や、遊びの環境の工夫について意見を出し合い、今後の方針を園全体で共有した。
- 6月、7月、11月、12月に東京成徳短期大学 教授 松本 純子先生を講師としてお招きし、研究保育や研究協議会を実施した。研究保育や協議会を通して、教師の援助の方法や遊びの環境の構成についてご指導いただいた。

【研究の経過】

教師が以下のことを意識して保育を行った

- 共通の場である廊下やテラスで「お店ごっこ」「コンサート」などを行い、様々な幼児の目に留まるようにする。
- 体を動かす遊びやルールのある遊びと一緒に楽しめる場を作る。
- 制作コーナーや、自然物・飼育コーナーを、両学年共通にする。
- 教師（担任）が他学級の幼児と関わる機会をもつ。

その結果

成果(幼児の変容)

- 制作や生き物の世話などをする中で、会話が生まれたり、刺激を受けたりする姿が見られた。
- 同じ場所に様々な友達が居ることで様々な関わり合いが生まれた。



- 教師が他学級の幼児との関わりを増やしていくことで幼児同士が自然と関わる姿が増えた。
- 年長児が年中児に優しく接したり教えたりする姿が多く見られるようになった。



そこで教師は、
新たな課題や視点に気が付いた

学級の友達など
身近な幼児同士の関わりにも
目を向けてみよう!



年中組「友達がいてくれてよかった・友達といると楽しい」という思いをもっと味わえるようにして、幼児の「友達と一緒に遊ぼうとする気持ち」や「人と関わりたい気持ち」を育むことが大切なのではないか。

年長組友達同士の間で、自分の思いを「伝えよう」とする気持ちや相手の思いをきちんと聞こうとする意識があまりもてていない姿が見られた。もっと“伝えよう・聞こう”とする気持ちを育むことが大切なのではないか。

※その後は次ページにある援助を心掛けて保育を行うことにした

【研究を通して分かったこと】

～友達と一緒にいる楽しさ・友達がいることのよさを感じられる

ようにするために心掛けた援助～

- ・ 幼児が興味をもてるような環境を用意し、その遊びの中で友達との関わりがもてるようにする。
- ・ 友達がいるよさを言葉にして伝えたり、楽しさを動きや表情に表して共感したりする。
- ・ 友達と一緒に遊ぶ中でやりとりに必要な具体的な言葉や伝え方を知らせる。
- ・ 友達との遊びの中でそれぞれが思いを出している姿を認め、必要に応じて相手に思いが伝わるよう教師が仲介する。

～友達に思いが伝わる・互いの思いが伝わり合う喜びを感じられる

ようにするために心掛けた援助～

- ・ 思いが伝わってよかった、伝わって楽しかったと思えるようにする。
- ・ 友達と思いや考えが伝わり合うことで遊びが面白くなったということを感じられるようにする。
- ・ 相手に思いがしっかり伝わるように、伝える側の幼児に、相手の名前をはっきりと呼んだり、肩を叩いたりするなどの伝え方を具体的に知らせる。
- ・ 思いを受けとったことが相手に伝わるように、聞く側の幼児に、相手の目を見たり、体を向けたりするなど、話を聞く態度や、言葉や表情での応答の仕方を具体的に知らせる。

【研究の成果】

幼児側の成果

- ・ 友達と一緒にいることの心地良さを感じはじめたことで、自分から遊びに入っていくようにしたり、誘い合って遊んだりする姿が増えた。また、学級のみならず、学年のみんなで遊ぶ活動を楽しんでいると感じ、様々な活動に喜んで参加するようになった。
- ・ 思いの伝え方や友達の思いを受け取った際の応答の仕方に変化が見られた。思いが伝わり合うことで、より遊びが面白くなることを感じたり、互いを思いやり助け合ったりする姿が見られるようになった。
- ・ 両学年が自然と関わる機会が増え、学級の枠にとどまらず、様々な人と関わって遊ぶ楽しさを味わうことができるようになった。



教師側の成果

- ・ 協議会では、様々な角度からの意見を聞いたり、話し合いの中で考えを深めたりする時間となり、幼児理解が深まった。また、【研究を通して分かったこと】を意識して指導することで、教師の幼児への言葉の掛け方などが変わり、幼児がより人との関わりを深めることにつながった。
- ・ 異年齢の幼児が関わる機会をもてるよう、意識して教師間の連携をとることができ、そのことが幼児側の成果にある育ちにつながった。また、様々な人と関わる機会をもつ（様々な人の話を聞く）というねらいのもと学級の担任が交替して保育を行うことも行い、実態に応じた保育を行うことで、保育スキルの向上にもつながった。

【今後の課題】

- 今後も教師間の連携をとりながら、幼児が個々にやりたい遊びに取り組む中で、様々な人と共に遊びを楽しむ体験を積み重ねられるよう、教師の援助や環境の構成を工夫していきたい。